

2023年3月8日

現実空間と仮想空間のハザマで

今、世間では、メタバースとか、バーチャルなどと現実空間と異なる3次元の仮想空間を介した仕事やレクリエーションやゲームなどの広がりが目覚ましく、それらに対する一層の導きも各種のメディアによって喧伝されています。

「メタ (meta)」とは「超越した」とか「高次の」という意味で「バース」は「ユニバース (宇宙)」を組み合わせた造語だそうです。

この現状について筆者独善の解釈で理解するならば、仮想空間の行きつく先は「現実世界の厳しさはもとより、人間の個性や努力の結実や成果が過小評価されて行くのかもしれない」と悲観的な考えに陥ってしまう点は、杞憂であってほしいところです。

また、子供たちばかりでなく、大人までもが夢中になっているスマホやネットのバーチャルなアクションゲームなどが、人間の意識や脳にネガティブな側面を及ぼすことも否定できないだろうという警鐘も巷から声高に聞こえてくることはありません。

幕末から大正期に活躍した仏教哲学者の井上円了は「人類史上、賢者と言えるのは、ソクラテスをはじめカント、孔子、釈迦の四聖である」と喝破していますが、その孔子の「論語」に傾倒した渋沢栄一は、孔子の教えに沿って「実行できる実際学 (現場力) 以外に学問はない」と断言しています。

その是非はさておくとして、今後、5G から 6G へと確実に進化し続けていくに違いない高度情報通信が世界経済に大きな変革をもたらしていくことは間違いないことでしょう。

そうしたなか、メディアをはじめ多くの通信事業者が、挙って「多大な収益が見込まれる仮想空間の事業に突き進んでいる現状」が憂慮されるのです。

つまり、渋沢の哲学でもある「実際学＝現実空間に限る」とまで言いきるつもりはありませんが、リアルとバーチャルのハザマにあって、世界の多くの経営陣が利潤の追求に汲々とせざるを得ないのは、資本主義社会の必然なわけです。

コロナ感染予防のテレワークの他、遠隔医療や介護などの一部においては、AI を介したリアル空間における IOT(モノのインターネット)化が進められているものの、キャリアが進めている高度情報通信事業の圧倒的な部分は、仮想空間におけるバーチャルな課金ゲームなどの収益事業が急速に拡大しているわけです。

そこで、牽強附会の誹りを甘んじて受け入れつつ思うことは、障害者や貧困者など、弱者の娯楽 (無償・無料の文化、芸術、スポーツなど) にも配慮した現実 (リアル) 空間の高度情報通信事業を見落としてはならないということです。

SDGs が掲げる経済、環境、福祉を貫く 17 項目の成し遂げるべき事項の精神は、まさに社会的弱者はもちろんジェンダーフリーや LGBTQ をも包摂する「誰一人取り残さない」持続可能な社会の実現に向けた取り組みであるということです。